

肺炎

高齢者に多い疾患－肺炎

問題 1 次の問いに答えよ

①肺炎の主な原因を2つあげなさい。

②肺炎の主な症状を3つあげなさい。

問題 1 解答

- ①インフルエンザ、マイコプラズマ、誤嚥
など
- ②発熱、咳、痰、呼吸困難、全身倦怠感、胸痛
など

高齢者に多い疾患－肺炎

問題2 次の問いに答えよ

- ①肺炎の予防策を4つあげなさい。
- ②誤嚥性肺炎の予防策を2つあげなさい。

問題 2 解答

- ① うがい、手洗い、換気、加湿、風邪をひかない、インフルエンザワクチン接種、肺炎球菌ワクチン接種 など

基本は「うがい・手洗い」！

高齢者は風邪から肺炎になることが多いので早めの受診が大切！

- ② 口腔ケア、義歯の手入れ、うがい、誤嚥しにくい食形態、食事の姿勢、嚥下体操、嚥下リハビリ など

高齢者がかかりやすい肺炎であるが、予防可能であり、**介護の力を存分に発揮できる分野**でもある。

風邪をひかないための生活管理や予防接種の徹底、口腔ケアの徹底、誤嚥性肺炎を防ぐための食形態の工夫や適切な姿勢、嚥下体操などにより**肺炎ゼロを目指したい**。

高齢者に多い疾患－肺炎

問題3 正しいのはどれ？

- ①肺炎は、がん、心疾患に続いて、死亡原因の第3位である（2017年）。
- ②慢性気管支炎や喘息など肺の病気を持っていると、肺炎になりにくい。
- ③口腔ケアは、肺炎予防に効果はない。
- ④寝たきりの時間が長いと、口の中の雑菌が肺に入りやすく、肺炎を発症しやすいので、できる限り寝たままでないように介護することが望ましい。

問題3 解答

正しいのは①、④

②慢性気管支炎や喘息などの疾患があると、肺炎になりやすい。肺気腫など慢性閉塞性肺疾患の持病がある場合は注意が必要である。

③口腔ケアは、肺炎予防に効果がある。
口腔内の細菌数は、口腔ケアの充実や歯科医師との連携を図ることで減少する。
歯科医師のかかりつけ医がいない高齢者は死亡率が高いことも分かっている。虫歯や歯周病のない口腔内を目指したい。

高齢者に多い疾患－肺炎

問題4 誤りはどれ？

- ①風邪のような症状が数日続いている 場合は、肺炎を疑い、速やかに受診する。
- ②通常は38℃以上の発熱があるが、高齢者の場合、高熱が出ないことがある。
- ③肺を包んでいる胸膜まで炎症が及ぶと、腹痛を訴えることがある。
- ④受診時には、痰の色や粘性などを詳しく主治医に報告する。

問題4 解答

誤っているのは③

③肺を包んでいる胸膜まで炎症が及ぶと腹痛ではなく胸痛を訴えることがある。

高齢者の場合、風邪だと思っていたら肺炎であったということも多いので、早めに受診することが必要である。本人の既往歴や体力、免疫力などとも関連があるので、情報を得ておくことが大切である。

高齢者に多い疾患－肺炎

問題5 誤りはどれ？

- ①風邪をひいている利用はできる限り個室対応として、他の利用者やスタッフとあまり接触しないように配慮したほうが、感染拡大に有効である。
- ②風邪や肺炎の感染拡大防止には、介護職員の手洗い、うがいの徹底は、あまり効果がない。
- ③インフルエンザが流行している時期には、介護施設への面会者の健康状態にも気を付け、インフルエンザの可能性の高い方は面会を断ることも必要である。
- ④風邪やインフルエンザが流行する時期には、介護職員の健康管理がとても重要である。

問題 5 解答

誤っているのは②

風邪や肺炎の感染拡大防止には、介護職員の手洗い、うがいの徹底はとても効果があるので、徹底することが重要である。

介護職員の手によって細菌やウィルスが広がり、介護施設全体に感染が拡大する可能性がある。

高齢者に多い疾患－肺炎

問題6 誤りはどれ？

- ①CRP検査（炎性反応検査）は、肺炎などの感染症に罹患しているかどうかの指標になる。
- ②肺炎の原因菌である肺炎球菌には、ワクチンがあるので予防接種をすると肺炎球菌由来の肺炎の予防につながる。
- ③肺炎球菌ワクチンは、誤嚥性肺炎にも効果がある。
- ④誤嚥性肺炎は、気管の解剖学上の形状のために右肺が肺炎を起こしやすい。

問題 6 解答

誤っているのは③

- ③肺炎球菌ワクチンの効果は、肺炎球菌が原因の肺炎のみ効果が期待できる。誤嚥性肺炎には効果は期待できない。

高齢者に多い疾患-肺炎

問題7 事例問題

昼食中に突然咳込んだAさん（男性、88歳、要介護3）が、咳をした後、苦しくなくなり、普通に食事ができるようになった。気になるのは、咳のあとから、声がかれてしまったことくらいだ。

そのまま様子観察をしているが、あなたは介護職員としてどうするか？

問題 7 解答例

食事中の咳込み後、苦しくなくても声がかかっている場合には、**誤嚥の可能性が高い**ので、速やかに受診するのがよい。

声がかれるという症状は、**嚙声(させい)**というが、嚙声は、誤嚥時に見られる症状であるため、咳込み後に嚙声が悪くならない場合には、受診をしたほうが**肺炎の悪化を予防**できるので安心である。

【参考文献】

- 1) 岩下馨歌里：研修用DVD安心安全ケア教育 下巻，日総研出版，2012.
- 2) 介護人財育成ぷらすVol. 5，No. 7（特別編集号），日総研出版，2008.

教材作成

有限会社ファイブアローズ

取締役 岩下由加里

※本教材は「介護研修115の問題用紙」（日総研出版）の教材を大幅に加筆修正したものである。

お疲れ様でした。